

## メッセージアウトライン

### コリント人への手紙 第一14:1～5「教会の徳を高めよ」

[1]「愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい」パウロは13章全体の結論として「愛を追い求めなさい」と勧める。これは継続して求め続けなさいという意味。愛は御霊の実の一つであり(ガラテヤ5:22)、信仰者が御霊に導かれ、御霊により頼んで信仰の歩みを進めていく時に、この実を結ぶものとされる。そしてこの愛のもとに、信徒一人一人に与えられた御霊の賜物はそれぞれの豊かな役割を果たすことができるようになるのである。パウロはここでは特に「預言をすること」を取り上げて、それを熱心に求めなさいと勧める。コリント教会ではこの時、異言の賜物が非常に重んじられており、御霊の賜物の多様性とその目的が忘れられ、軽んじられる傾向があった。それで彼は教会にとって重要な賜物である預言を取り上げて、異言と比較しつつ彼らを健全な立場へ導こうとしている。

[2]「異言を話す者は、人に話すのではなく、神に話すのです。というのは、誰も聞いていないのに、自分の霊で奥義を話すからです」

異言とは恍惚とした状態で話す意味不明のことば。「自分の霊で奥義を話す」とは恍惚状態で神を賛美し、喜びあがめることと思われる。これは個人的な神との交わりであり、人々に説教し、みことばを教え励ますという賜物ではない。誰も聞いていないのにこのような異言を語るのを見たら、何も知らない人々はその人のことを狂人と思うであろう。ところがコリント教会の人々はこの異言の賜物を熱心に求めていた。なぜならそれは直接神に触れられているかのように思わせ、人々の注目を集め、感嘆の的となるからである。しかし、そこには落とし穴がある。①そのような状態は容易に当事者を高慢に導く。

②この賜物を熱心に求めるあまり、でっち上げの偽の異言を語るようになる。

[3-4]「ところが預言する者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。異言を話す者は自分の徳を高めますが、預言する者は教会の徳を高めます」 預言とは、神のみこころと教えを語り、教会の信徒一人一人の徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるものである。これは神にではなく人に向かって話すのであり、みな益となるため、教会の前進、成長のためである。異言は自分の徳を高めるが他の人の徳は高めない。そういう意味で異言よりも預言のほうがまさっているので、パウロは異言ではなく預言することを熱心に求めなさいと勧めるのである。

[5]「私はあなたがたがみな異言を話すことを望んでいますが、それよりも、あなたがたが預言することを望みます。もし異言を話す者がその解き明かしをして教会の徳を高めるのでないなら、異言を語る者よりも、預言する者のほうがまさっています」

パウロの言わんとすることは異言も結構だが、もっと教会の徳を高めるような賜物を求めなさいということである。それは一人で異言を語って満足しているよりもはるかによいことである。もしもなお異言を語ろうとするのなら、その解き明かしをして教会の徳を高めることが必要であることも教えている。

私たちが御霊によって与えられている様々な賜物を自己満足のために用いるのではなく、教会の徳を高めるために、用いていかなければならない。